

II 「フューチャーセンター」とは？

(第2章-第1節)

フューチャーセンターは新しい概念であるため定義が一概ではありません。そこで研究会では次のように定義し、5つの要素を提示しました。また、他のフューチャーセンターの状況を把握するため「全国フューチャーセンター実態調査」を実施しました。

【フューチャーセンターの定義】

多様性のあるメンバーが
対話による
価値創造をする場

フューチャーセンターが成立する5つの要素

1 参加者の多様性

常に同じ参加者で、同じ課題について議論しても前進しない。多様性を持つことで、新たな価値が創造される。

2 課題設定

正しい課題設定では、多様な参加者が社会全体の未来を想像することでポジティブな対話が生み出される。

3 対話を生み出す場創り

「安全な場」を確保すること。創造的な会議には、それぞれが自由闊達に遠慮や恐れなく意見やアイデアを出せることが必要である。

4 全体のコーディネート

対話による価値創造をするためには、事前の打ち合わせやアフターフォローまで、全体を見通したプランニングが求められる。「事務局力」も重要である。

5 成果の評価

セッション当日のみを評価するのではなく、事前打ち合わせや、終了後の参加者の行動も含めた評価を行わなければならない。

I 要旨

(第1章-第1節)

【問題提起】

複雑化する現代において、未来を見通すことは非常に困難です。行政施策立案、企業経営等のさまざまな側面で予測不可能な未来に対応するためには多様なステークホルダーとの創造的な対話により、知的弾力性を紡ぎ出す必要があります。

本研究では、多様な主体が対話による価値を創造する場としてのフューチャーセンターを、いかに社会に実装するかについて研究し、ひいては対話による持続可能な社会の仕組みづくりを目指します。



研究会は、多様な視点からの知識や経験を取り入れるため、産官学民に配慮した研究員で構成しています。



前向きな対話から未来への価値創造を促すため、ワークショップの手法を取り入れることもありました。

FUTURECENTER

フューチャーセンターの
社会実装に関する研究



この絵は、アメリカの詩人ジョン・ゴドフリー・サックスが1872年に発表した詩 "The Blind Men and the Elephant" (『盲人たちと象』) に描かれた挿絵です。盲目の男たちが、ゾウのそれぞれ異なる部位を触ったところ、象が壁、蛇、樹、扇、ロープのようであると主張し、意見が対立しました。一人ひとりの意見は間違っていないかもしれませんが、多様な視点からの意見や知恵を共有しなければ全体像は把握できません。

現代の課題はこの象のようである

V 社会実装の試案モデル

(第5章 - 第1節 - 第2項)

現代の社会課題は、一つのセクターだけでは解決が困難な状況にあり、だからこそ、多様なステークホルダーとの創発的双方方向性のある対話により、知的弾力性を紡ぎだし、価値創造をする必要がありました。

そこで、「フューチャーセンター」に着目し、事例検証からその有効性を確認することができました。

では、何から始めるべきなのか？研究会からは次のモデルを試案として提案します。

あらゆる人々を、対話を生み出す場へと導くための道標が必要であり、フューチャーセンターは中間支援的組織や企業連合体など、それぞれが保有するハブ機能とハブ機能をさらに結びつけることが有効である。

試案モデル 「連携協定」

本研究会では、企業、自治体、大学、NPOの4者による「連携協定」を実装モデルとして提案します。各セクターでフューチャーセンターの認識を共有し、必要に応じて相談、マッチングの支援を行える機能です。

フューチャーセンターの社会実装に関する研究会
皇學館大学 池山 敦
特定非営利活動法人 Mブリッジ
三重県地方自治研究センター

事務担当
三重県地方自治研究センター 主任研究員 栗田
電話 059-227-3298 / FAX 059-227-3116
e-mail info@mie-jichiken.jp

IV 社会実装の結論

(第5章 - 第1節 - 第1項)

事例検証・ヒアリング調査から分かったこと

玉城町では、住民参加のデザインとして無作為抽出による参加案内を発送することで、さらなる【①参加者の多様性】の確保に繋げていました。

鳥羽市議会「TOBAミライトーク」では、住民との対話を目的とした「グループディスカッション」が選択でき【③対話を生み出す場創り】や【④全体のコーディネート】の要素が有効に機能していました。また、本研究会が第三者視点からTOBAミライトークを評価することで【⑤成果の評価】も確保することができたと考えています。

従来の広聴広報機能、連携推進機能にフューチャーセンターの要素を加えることは、非常に有効であることがわかりました。しかし、中立性や公平性の考え方は、時として単独の組織への接触を困難なものにしてしまう事があります。そのため、複数の組織から成る団体であることが、より有効にフューチャーセンターを機能させることもあるようです。

また、フューチャーセンターの要素を満たすことができれば、物理的な施設の有無は必ずしも必要ではないことも確認できました。

結論

従来の広聴広報機能、連携推進機能にフューチャーセンターの要素を加えることで、フューチャーセンターと同等の機能とみなし、実装とする。実装組織は、単一の組織に限らず、複数の組織が結集する中間支援的組織や企業連合体などにおいても、本来の活動目的に沿う形で重要な役割を果たすことができる。

III 実装モデルの提示と検討

(第4章 - 第1節)

フューチャーセンター5つの要素の有効性を示すため、また、実装に向けての課題克服のため、仮に4つの実装モデルを示すことで検証を行いました。事例の検証や、ヒアリング調査から多くのことが分かってきました。

実装のモデル	事例検証・ヒアリング調査
組織の長の判断に基づくフューチャーセンターの実装モデル	氷見市役所庁舎 薩摩川内市スマートハウス
現在の会議の仕組みを変革することで、フューチャーセンターと同等の機能とみなした実装モデル	玉城町玄甲舎活用100人委員会 鳥羽市議会 TOBA ミライトーク
組織での対話・連携機能としてのフューチャーセンター実装モデル	中間支援的組織 企業連合体
CSR推進のためのフューチャーセンター実装モデル	信州フューチャーセンター



玉城町玄甲舎活用100人委員会



信州フューチャーセンター